

江蘇大学出版社影印『龍谿王先生全集』の底本について

山路 裕

はじめに

二〇一九年十月に、王畿の全集である『龍谿王先生全集』の影印本が、江蘇大学出版社から全四冊として出版された（以下、本書）。同社からはほかに、『陽明先生文録』や『順渠先生文録』などが、本書と同じ叢刊として刊行されている。日本における本書の流通は非常に少なく、日本国内の大学図書館が所蔵する書籍を調べることができるCinii Booksで検索してみても、わずかに信州大学附属図書館が所蔵するだけである。

本書は第一冊目の冒頭に出版説明を附しているが、これは叢刊全体を通しての出版説明であって、ここには本書の底本やその所蔵先などは記されていない。本書底本の書誌情報については、右のCinii Booksで検索した結果の「注記」にもあるように、本書標題紙に「明萬曆四十三年張汝霖校刊本」とあるのみである。しかしここで問題だと思われるのは、本書には「萬曆四十三年張汝霖校刊本」であることを示す情報がどこにもなく、本書は本当にその影印本なのかという疑問

がもたれることである。

そこで本小論では本書の紹介も兼ねて、本書が影印した底本、およびその所蔵機関を明らかにし、この影印本を後に手にする人の混乱を招くことがないように企図するものである。

一 王畿の全集の版本概観

王畿（一四九八～一五八三）、字は汝中、号は龍溪、浙江山陰の人。王守仁（一四七二～一五二八）晩年の弟子であり、守仁没後は江南の各地を講学してまわり、陽明学の伝播に大きな役割を果たした。

王畿の全集については、陽明後学文献叢書『王畿集』中の呉震氏による編校説明や、彭国翔氏「明刊《龍溪会語》及王龍溪文集佚文―王龍溪文集明刊本略考^②」に説明がある。ここではそれら先学による研究を参照しながら、王畿の全集の版本を概観する。ただし、本小論ではその全てを網羅的に紹介するのではなく、本書の底本に関わる万暦年間（一五七三～一六二〇）に刊行された全集の版本に限定して、紹介することにする^③。

王畿の全集のうち、最も早くに刊行されたものは万暦十六（一五八八）年蕭良幹刻本である。当該刻本は『四庫全書存目叢書』集部第九十八冊（中国社会科学院文学研究所藏本影印）、中華再造善本（中国国家図書館藏本影印）などに収められる。いま前者の版本を『四庫存目標注』によって概観してみれば以下のようになる。半葉九行、行十九字、白口、単魚尾、四周単辺。各卷卷首に「龍谿王先生全集」とあり、次の行に「門人周怡順之甫編輯／查鐸子警甫校閱」とあり。万暦丁亥（十五年）の紀年をもつ蕭良幹の序文と、同戊子（十六年）の紀年をもつ王宗沐の序文を収める。

万曆十六年刊本の次に刊行されたのは、万曆四十三年張汝霖校・丁賓刻本、すなわち本書が影印したと称する版本である。現在、東京大学東洋文化研究所やハーバード燕京図書館、台湾国立図書館に所蔵されている。燕京図書館所蔵本は Harvard Digital Collections と閲覧できる。いま『美國哈佛大學哈佛燕京圖書館中文善本書志』を参照しつつ、該データベースで公開されている画像をもとにその概要を記すと以下の通り。全二十二卷、全八冊⁴⁾。半葉十行二十字、左右双辺、白口、単魚尾。卷二十までの内容は万曆十六年刊本と同じであるが、本冊の目録（目次）では卷二十一に「大象義述」、卷二十二に「徐存齋公撰先生傳」「趙麟陽公撰先生墓誌銘」「張陽和公吊先生文」とある。各卷卷首に「龍谿王先生全集卷之幾」とあり（卷七・八は「龍谿先生全集」、卷十八は「龍溪王先生全集」。大象義述卷は書題のみで、編著者事項の次行に「大象義述」とあり、卷二十二は書題なし）、次の行に「門人嘉善丁□賓編／後學秀水黃承玄／山陰張汝霖校」とある（卷十四卷首のみ「秀水」を「繡水」に刻字する）。各卷に収める内容は、卷一より卷八までが語録、卷九より卷十二までが書簡、卷十三より卷十四までが序、卷十五から卷十六までが雜著、卷十七が記説、卷十八が詩、卷十九が祭文、卷二十が状誌表伝である。この後に張元抃の「祭王龍谿先生文」・趙錦の「龍谿王先生墓誌銘」・徐階の「龍谿王先生伝」が続⁵⁾き、さらに「大象義述」が続⁶⁾く（したがって、張元抃・趙錦・徐階の文章と「大象義述」の順番が本冊目録と異なっている⁶⁾）。卷頭には王宗沐の「龍谿王先生集舊序」、蕭良幹の「龍谿先生集舊序」、張汝霖の「重刻龍谿先生集紀事」がある。

右の万曆四十三年刊本に次いで刊行されたのは、同本の重刊本である万曆四十七年丁賓刻本である。現在、国立公文書館に所蔵されている。概要は万曆四十三年刊本と同じ。ただし公文書館本は、卷二十二が徐階「龍谿王先生伝」・趙錦「龍谿王先生墓誌銘」・張元抃「祭王龍谿先生文」と本冊の目録通りに配列される。卷頭に収録される序文は万曆四十三年刊本とほぼ同じであるが、蕭良幹の序文の後に周汝登の「刻王龍谿先生集序」（万曆己未（四十七年）の紀年あり）がある。

二 本書の底本とその所蔵先および旧蔵者

1 本書の底本と所蔵先

以上に王畿の全集の版本について概観したところで、本書が影印した底本が、さきにあげたいずれのものに該当するかを検討したい。結論をさきに述べるならば、本書が影印したのは、「萬曆四十三年張汝霖校刊本」ではなく、「万曆十六年蕭良幹刊本」である。この点を明らかにするために、本書の版式・序文・内容を左に記す。

1 版式 半葉九行、行十九字、白口、單魚尾、四周單辺

2 序文 蕭良幹序文・王宗沐序文

3 内容 全二十卷、各卷卷首に「龍谿王先生全集／門人周怡順之甫編輯／查鐸子警甫校閱」

一見してあきらかな様に、本書の版式・序文・内容は、すべて万曆十六年刊本に一致しており、本書の底本は「万曆十六年蕭良幹刊本」であると見てよいように思われる。

それでは、その底本の所蔵先はいつたいどの機関であろうか。ここで注目したいのは、本書一四五ページに見える補抄部分である。本書巻一「撫州擬峴臺會語」の最後部（一四二頁・四十葉裏）は、あきらかに文章が途中で切れていて完結していない。つまり、本来あるはずの四十一葉にあたる部分がない。「撫州擬峴臺會語」は、撫州（江西省撫州府）における講会の記録で、当地の先達である陸九淵の言葉を参会者が王畿に質問し、王畿がそれに答える形で記録される資料である。右会語資料のうち缺けている部分は、その最後条の質問に対する王畿の答えのうち、「説得象山」から「足以語此」までである。本書では、この缺けた部分を墨筆で記した用紙に書きして挿入することで補っており、この補抄部分は本書の特

徴の一つと言えるのである。⁸⁾

さて、この補抄部分を手がかりとして探していくと、京都大学人文科学研究所蔵の『龍谿王先生全集』に行き当たる。人文研所蔵の『全集』巻四十一葉に相当する部分を見てみると、本書と同じ補抄部分を確認でき、その補抄用紙、字体、補抄者が附した朱筆の句読点などが一致する。このほか、本書の底本と人文研所蔵本とは、版式・序文の全てが一致する。

本書が万暦十六年刊本であれば、いうまでもなくその底本である人文研蔵本も万暦十六年刊本であるはずである。それにも関わらず、本書の標題紙ではなぜ「萬曆四十三年張汝霖校刊本」となっているのだろうか。人文研所蔵の『全集』は、『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』に記載がないが（このことについては後述）、人文科学研究所東アジア人文情報学研究センターが運営する「漢籍データベース」によれば「明刊本」とある。⁹⁾しかし同所が運営する、当該『全集』を閲覧できる「東方学デジタル図書館」の表記では、ある時期までは「萬曆四十三年張汝霖校刊本」となっていた。¹⁰⁾本書の標題紙が「明萬曆四十三年張汝霖校刊本」とするのは、この表記を襲ったものではあるまいか。

以上から、本書が影印する際に底本としたのは、人文科学研究所蔵『龍谿王先生全集』であると断定できる。そして、本書が標題紙において底本を「萬曆四十三年張汝霖校刊本」としたのは、「東方学デジタル図書館」の記載をそのまま襲ったことによる誤りではないかと思われるのである。

2 旧蔵者

さきに、人文研の所蔵する『全集』が、『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』には記載されていないことを述べた。

このことは、当該『全集』の旧蔵者が誰であったのかということと関係している。そこで次にこのことを見ていくことにする。

人文研所蔵の『全集』には、全十二冊の裏見返しに寄贈者印が押されており（江蘇大学出版社影印本ではこの寄贈印を除いている）、この寄贈者は中国思想史研究者の島田虔次氏ゆかりの方であることが分かる。いうまでもなく、島田虔次氏は陽明学をはじめとする明清思想史研究に多大なる足跡を残した研究者であるが、二〇〇〇年に死去している。その蔵書は多くが韓国・東開大学に寄贈されたが、残る一部については京都大学人文科学研究所に寄贈された。その際の寄贈書目録を記した『漢字と情報 第十号別冊』には「龍谿王先生全集二十卷附大象義述一卷」とあって、当該『全集』もその内の一つであることが確認できる。人文研の『漢籍分類目録』は、もともと新しい版でも一九七九年であるから、二〇〇〇年に死去された島田虔次氏の旧蔵本の記載が当該『目録』にないのも当然である。

三 「増大象義述」について

以上、本書が底本とした万曆十六年刊本の所蔵先が京都大学人文科学研究所であること、さらに同所が所蔵する『全集』が島田虔次氏旧蔵本であることを確認した。しかしここで疑問点が一つある。それは、右述の『漢字と情報 第十号別冊』に「龍谿王先生全集二十卷附大象義述一卷」とあるうちの「大象義述」が、なぜ万曆十六年刊本の『全集』に附されているのかということである。

「大象義述」は、『周易』の十翼の一つである象伝の「大象」に対して王畿が著した注釈書である。永富青地氏の報告に

よれば、万暦元年にその初刻本が単行本として刊行されている¹²⁾。また、本考の「一 王畿の全集の版本概観」でも記しておいたように、「大象義述」は万暦四十三年に『全集』の一部として刊行されている¹³⁾。逆に言えば、万暦四十三年になつてはじめて「大象義述」は『全集』の一部として刊行された。そうだとすると、人文研所蔵の万暦十六年刊本『全集』に、なぜ「大象義述」が附されているのかという疑問が生じる。

そこで検証してみるに、人文研所蔵の漢籍を一部閲覧できる「東洋学デジタル図書館」を見ると、そこに「大象義述」の書影は含まれていない。それもそのはずで、実は人文研所蔵の『全集』に「大象義述」はもともと附されていないと思われるのである。とすると、『漢字と情報 第十号別冊』の記載は誤りではないか。『漢字と情報』がなぜこのような記載をしたのかは定かではない。かりに「大象義述」があったとしても、それは単刻本か、万暦四十三年ないしは四十七年刊本に附されたものであるはずで、万暦十六年刊本に「大象義述」が附刻されたことを意味するわけではない。

おわりに

本小論では、江蘇大学出版社が影印した『龍谿王先生全集』の底本が「明萬曆四十三年張汝霖校刊本」ではなく、「万曆十六年蕭良幹刊本」であること、その所蔵機関が京都大学人文科学研究所であり、かつその蔵本が島田虔次氏旧蔵本であることを見てきた。本小論が、本書の書誌情報を提供するものとして参照されるならば幸いである。

【附記】京都大学人文科学研究所所蔵の『龍谿王先生全集』二十巻について、当該本に「大象義述」が附されているかどうかの確認は、京都大学大学院博士後期課程の田尻健太氏に実施していただいた。本来は本稿筆者が自ら出向いて確認すべきであるが、コロナ禍にあつて人の移動の自粛が要請されていたための処置であつた。田尻氏には特に記して感謝申し上げる。

(二) 松学舎大学大学院博士後期課程

- (1) 二〇二一年十月三十一日閲覧。
- (2) 彭国翔『良知学的展開―王龍溪与中晚明的陽明学 増訂版』(三聯書店、二〇一五年所収)
- (3) 王畿の版本には、清刊本や、和刻本がある。詳しくは呉震氏「編校説明」を参照。
- (4) 東京大学東洋文化研究所蔵本は十二冊である。
- (5) 『美國哈佛大學哈佛燕京圖書館中文善本書志』は、「卷二十二爲徐存齋公撰先生傳・趙麟陽公撰先生墓誌銘・張陽和公吊先生文(三篇俱佚)」と記すが、公開されている『全集』を見る限りでは、この三つの文章はいずれも現存している。
- (6) 東洋文化研究所蔵本は、「大象義述」、徐階「龍谿王先生傳」、趙錦「龍谿先生墓誌銘」、張元抃「祭王龍谿先生文」の順に配列される。
- (7) なお、呉震氏は『王畿集』編校説明の中で、万曆四十七年刊本を「爲二十卷本、少卷末兩卷」と記す。「兩卷」とは本冊目録上の「卷二十一 大象義述」と「卷二十二」の徐階「龍谿王先生傳」・趙錦「龍谿王先生墓誌銘」・張元抃「祭王龍谿先生文」の三篇を指すと思われる。しかし公文書館蔵万曆四十七年刊本では、この二巻は『全集』とは別冊になつてはいるものの現存している。
- (8) ただし本書では、なぜか補抄部分(四十一葉表相当)を巻一・四十葉裏とあわせて巻二・一葉表の後に配して影印しており、一見すると読者が混乱する処置を行っている。本文中に本書の補抄部分を一四五ページ、「撫州擬峴臺會語」の最後部を一四二ページと記して、ページ数が連続していないのはこうした理由による。
- (9) 二〇二一年十月三十一日閲覧。
- (10) 過去のウェブサイトの履歴を調べることができる、アメリカのウェブサイトInternet ArchiveによつてWay back Machineを使って、過去の「東方学デジタル図書館」当該ページを見てみると、二〇二〇年六月十八日までは「萬曆四十三年張汝霖校刊本」という表

記であったことが分かる。現在では「東方学デジタル図書館」の書誌情報も「明刊本」となっている。ただし、後文で述べるように人文研蔵本の旧蔵者は島田虔次氏であるが、その寄贈目録を記す『漢字と情報 第十号別冊』（二〇〇五年四月）では、すでに『全集』を「明刊本」として記載している。

(11) 井波陵一「東方部への新たな贈り物―島田虔次先生旧蔵書の受入」(『漢字と情報 第十号』二〇〇五年三月所収)。

(12) 永富青地「北京図書館蔵『大象義述』について」(『汲古』第三十八号、二〇〇〇年)

(13) ところで、永富氏は前掲の論考において、『大象義述』を収録する王畿の『全集』は、「万曆四十七年（一六一九）刊の丁賓編『龍溪王先生全集』及び本書を祖本とする和刻本のみである」と述べる。氏が右論考の後に発表された「天一閣博物館所蔵の三卷本『大象義述』について」(『汲古』第五十六号、二〇〇九年)も同様の認識であると思われる。しかしその一方で、永富氏はすでに「王畿の易學と丁賓―大象義述を中心として―」(『東洋の思想と宗教』第六号、一九八九年)中で、王畿の全集は明代に二度刊行されたと述べ、丁賓の主編にかかる二度目の刊本を万曆四十三年としたうえで、「大象義述」はこの刊本において始めて全集に加えられたと正確に述べている。本小論でも紹介したように、「大象義述」は万曆四十三年刊本にすでに収録されており、右に見た永富氏の見解では後者が正確であるように思われる。

